

癌手術を行った134例

【結果】平均年齢は60±12.0歳, 部位別症例数の上位はS状結腸癌37例, 上行結腸癌33例. 進行度別症例数は早期癌54例, 進行癌81例で年々進行癌の割合が増加. 術中合併症は血管損傷3%, 腸管損傷1.5%, 術後早期合併症は創感染9%, 腸閉塞3.7%, 縫合不全1.5%. 開腹への移行は16例で最多原因は癒着であった. 開腹手術症例と比較を行うと手術時間は腹腔鏡下手術で有意に長かったが出血量, 術後の在院日数, 排ガスまでの日数, 歩行までの日数は有意に短かった. 術後早期合併症は有意差なかった.

【結論】腹腔鏡下大腸手術成績は開腹手術のそれと比し劣らない. 今後は長期成績を出していきたい.

1330 SNPs の case-control 解析により, 3 遺伝子座の 18 SNPs が LOAD と有意に相関することを見出した. そこで, これらの SNPs と性別, 年齢, LOAD の強力なリスク遺伝子である *APOE* ( $\epsilon$ 4 アリル) を含めた相互作用解析を行った. 本研究会ではその結果について考察・議論したい.

## 2 Bcl11b/Rit1 遺伝子の腸管腫瘍への修飾効果

佐藤 俊大・葛城 美徳・岩崎 友洋  
小幡 美貴・廣川 祥子・三嶋 行雄  
木南 凌

新潟大学大学院医歯学総合研究科・  
遺伝子制御講座・分子生物学分野

Bcl11b/Rit1 は放射線誘発マウス胸腺リンパ腫の遺伝解析から単離された新しいがん抑制遺伝子であり, ノックアウトマウスの発がん実験からハプロ型不全を示すことが明らかとなった. ヒト Bcl11b 遺伝子座は T リンパ球性白血病で染色体転座が観察されるが, ヒト大腸がんでも高頻度に LOH が観察される. これは大腸がんの発症に Bcl11b 遺伝子が関与する可能性を示唆する. そこで, 大腸がんモデルである Min マウス (*APC<sup>Min/+</sup>*) と Bcl11b-KO ヘテロマウスを交配し, Bcl11b 遺伝子型の違いによる大腸・小腸がん発症への影響を調べた. 生後 18 週でマウスを安楽死させ, 腸管を固定後, 腸管内の腫瘍(腫瘍)を肉眼および顕微鏡下で観察した. 変異 APC が遺伝したマウスでは予想通り腫瘍が観察され, その後は Bcl11b 遺伝子型の違いにより明らかな違いを示した. 一方, 腫瘍の平均サイズは変化しなかった. これらの結果は, 一つの Bcl11b 遺伝子に欠損があると腫瘍形成の進展を早めないが, 腫瘍発生の頻度を上げる, ということを示唆する.

## 第7回新潟ゲノム医学研究会

日時 平成19年6月9日(土)  
午後1時~5時  
会場 新潟大学統合脳機能研究センター  
6階 セミナーホール

### I. 一般演題

#### 1 染色体10qにおけるアルツハイマー病のリスク遺伝子相互作用解析

宮下 哲典・朝倉まどか・郷野 辰行  
武井 教展・桑野 良三  
脳研究所・附属生命科学リソース研究  
センター・バイオリソース研究部門

我々は染色体10qに焦点を絞り, 晩期発症型アルツハイマー病(LOAD)のリスク遺伝子探索を行った. LOAD 1526例, 対照1666例を用いた